

「酒」に交われれば赤くなる

先人のありがたき「お言葉」を胸に
飲兵衛はいつもネオン街

北原伸一

Shinichi Kihara



イラスト/永美ハルオ

「百薬の長」と「百毒の長」

「バツカスはネプチューンよりも多くの者を溺死させた」

ローマの諺だが、もちろん「バツカス」は酒の神であり、「ネプチューン」は海の神である。どちらも溺れたら辛いのだが、どうせ溺れるなら酒だなど納得するのが飲兵衛だ。ついでに女性にも溺れたい？

「世の中は酒と女が敵なり、どうか敵に巡りあいたい」（狂歌師・蜀山人 大田南畝）

贅沢な願望だが、これが実は一番苦しいはずだ、経験ないけど……。

酒にまつわる言葉や諺、格言は少なくなく、なるほどと唸る言葉ばかり。酒と同様、なんとも味わい深く、奥が深い。先人たちは良いこと言うなあ。

でも、総じて飲兵衛は、自らに都

合のいい解釈をしてしまう。下戸からすれば「金言耳に逆らう」と言ったところだ。

その代表例は何と言っても「酒は百薬の長」。飲兵衛の医者なら「ほどほどに」と付け加えながら肯定し、下戸の医者はハナから否定する。この「百薬の長」という格言は、紀元元年に中国の王奔が著した「食貸志」の中に出てくる言葉で、正確には「塩は食肴の将、酒は百薬の長」というらしい。

でも日本の「枕草子」では逆に「酒は百毒の長」と解説する人もいる。結局は何事にも度を過ぎてしまっただけではないかという教えを説いている。「徒然草」の中でも吉田兼好は「百薬の長とはいへど、万づの病は酒よりこそ起これ」と言う。

「1杯は健康のため。2杯は快樂のため。3杯は放縱のため。4杯は狂気のため」とは、ギリシヤの哲学者・アナカルシスによる戒めだ。

そうそう、このエッセイの通シタイトルになっている「酒天之美祿」、長年お世話になっているこの言葉も「漢書」の「食貸志」に出てくる酒の別称。「酒は天の美祿であって、天子が天下の人民たちを養ってゆくものであり、神のお祭りや幸福のお祈りも、衰えた体を助け、病んでい

る身を養うのも、酒でない、上手くないかというものである」。

なるほど——。飲兵衛には涙が出てくるほどのありがたきお言葉だ。秋田県の佐藤酒造店が「出羽の富士 天之美祿」という名の酒を造っている。新潟の越後酒造場が造る「越乃八豊」のラベルにも「天之美祿」が入れられている。

神戸には同名の居酒屋があり、地元明石の昼網で獲れた魚を食べさせられる隠れ家的な雰囲気のお店。東京の茅場町にも「美祿」という名の居酒屋がある。同店のHPによれば、創作おでんと旬の食材が売り。今度行ってみよう。

伝家の宝刀「記憶なし」

老人の「お前はなぜそんなに酒を飲むのだ？」という問いかけに、男は「忘れるためさ」と答え、老人が「何を忘れたいのだ？」と畳み掛けると、男は「忘れたよ そんなことは」と返す。

古代のエジプトに伝わる小晰らしいが、よく「飲みすぎて覚えていない」を言い訳にするケースがある。格言でもなんでもないが、深酒したあげく、朝帰りましたときや、後ろめたさを感じているときに言い訳とし

てよく使う言葉だ。

また、「昨日どうやって帰ったかは覚えていない」というのは飲兵衛なら誰しもが経験していることだが、記憶が消失したにも関わらず帰宅できたことを、自らの帰巣能力が蟻を超えたとご満悦してないだろうか。酒を飲んで記憶がすっぱり抜け落ちることを「ブラックアウト現象」とか、「アルコール性記憶障害」「アルコール性健忘症」といい、酒、つまりアルコールが脳にまわることで、記憶を司る海馬において、記憶の伝達を行うグルタミン酸を受け取る働きをする「NMDAレセプター」の働きが鈍くなったとき、短期記憶はできても、中期的な記憶として脳に定着することができなくなる。これが、記憶がなくなるということに現れる人体メカニズム。しかし帰宅など毎日習慣的に行っていることは、アルコールの影響をそれほど受けないので、記憶が途絶えても、千鳥足できちんと家に帰り、その上風呂に入り、パジャマに着替え、ベッドに

潜り込んで寝ている。「手続き記憶」と呼ばれ記憶の中でもっともシンプルで原始的なものなのだ。

しかし、飲兵衛のズル賢いところは、翌日、妻に追及されると、バツが悪いのか「覚えていない」と開き

直る。

B級の恋愛ドラマにあるように、上着のポケットからホステスのメモが書かれた名刺が出てきたり、ワイシャツにグロスの惱ましい跡がついていたりしたときなど、とっさに気の利いた言い訳も出来ない状況であるほど、そう言う。

「モテる亭主は自慢」と泰然自若としている妻ならいいが、動かぬ証拠を掴み、鬼の首を取ったように、逃げ場を作らせず追及してくる。そんなときは妻自身も冷静な判断を失っているはずだ。「モンスタースタイル」
と化した妻に陳腐な言い訳など利くはずがない。

だから「覚えていない」を貫き通す。飲兵衛が長年にわたって培った自己防衛術である。罪悪感があるうが、なからうが、その場をやり過ごすための自己防衛だ。もつともたいがいの妻はそんな言い訳はお見通しで、腹の中ではせせら笑っているけどね。

賢者は言う。

「酒と女と歌を愛さぬものは、一生の間阿呆のまま」とドイツの詩人・フリードリヒ・フォン・シラーが言ったかと思えば、ドイツの神学者・マルティン・ルターは「酒は強く、王はもつと強く、女はそれよりさらに



強く、けれども、心理は最も強い」って言葉も残している。

誰が言ったか知らぬが、「酒に酔って女と車に乗って良かったためしはない」っていう言葉に、「酒と女は2合(号)まで」とのシニールなジョーク、大好きです。

「忠告はもつともぞん」

酒にまつわる言葉、集めてみるとなるほど多く見られる。賢人たちも酒で失敗してきたんだな。

系統的には酒と人間関係に関するものが少なくない。

イギリスの諺には「友とぶどう酒は古いほど良し」とあり、イギリスの詩人で牧師のエドワード・ヤングは「友情は人生の酒である」との見方をした。

一方、ドイツの詩人・ローガウは「酒が造り出した友情は、酒のように一晩しかかかない」と言い、「サイコロと女と酒は娯楽と苦痛をもたらす」と言う。

フランスの詩人・シャルル・ボードレルは「酒と人間とは絶えず闘い合い、絶えず和解している仲のよい2人の闘士のような感じがする。負けたほうが常に勝った方を抱擁する」……ん、なるほど奥が深い。

哲学者カント(ドイツ)は「酒は口を軽快にする。だが、酒はさらに心を打ち明けさせる。こうして酒は道徳的性質、つまり心の素直さを運ぶ物質である」と説き、酒は人間を成長させる一役を買って出ているとする。

もつとも多いのは、酒飲みに対して戒めを込めた格言だ。

「酒は何ものをも発明しない、ただ秘密をしゃべるだけである」(ドイツの詩人・フリードリヒ・フォン・シラー)

「酒を水のように飲むものは酒飲みに値しない」(ドイツの詩人・ボードンシュテット)

「酒入れば舌出ず、舌出ずる者は言失す、言失する者は身を棄つ」(中国の学者・劉向撰)

「酒飲みは自分では節酒していると思っているように、青年たちは自らを利口だと思いがちだ」(イギリスの政治家・チェスター・フィールド)

「くだらない人間どもを、宴会では避けるように心がけるがよい。酒が入ると、彼らの勝手な気持ちはますます緩んでくる。しらふでも恥知らずな彼らなのだ」(ローマの哲学者・セネカ)

「たいいていの人は、剣によるよりも、飲みすぎ、食いすぎによって殺される」(アメリカの医学研究者・ウィリアム・オスラー)

「1杯は人酒を飲み、2杯は酒酒を飲み、3杯は酒人を飲む」(法華経)

「2度子どもになるは老人のみならず、酔っ払いも然り」(ギリシヤの哲学者・プラトン)

こんなのもあった。

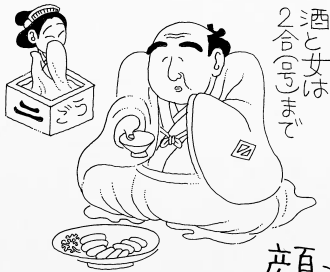
「酒が入ると英知が出て行く」(イギリスの神学者・ジョージ・ハーバード)かと思ったら、「酒が少量であればあるほど、頭は冴えて血は冷ややかになる」(アメリカの牧師・ベイン)。

ロマンチストな盃

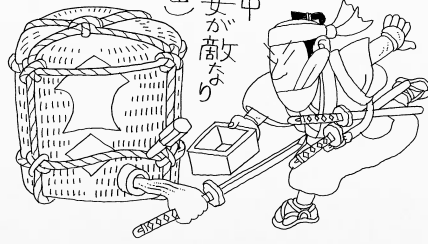
でも偉大な先人たちがなんと云おうが、やはり日が暮れてくるとそわそわ尻がむずがゆくなり、今晩は何をつまみにきゅつとやるかな、なんて考えたくなるものだ。その日の天候、気温、今何が旬で、安いか、どこで飲むか、誰と飲むか、そしてサーフの中身との兼ね合いを考えながら、今宵の酒戦略を練る。夕方の終業のベルという戦闘開始の号砲とともに、今宵もネオン街に繰り出していく。

そんなビジネス戦士にはもちろん、後押ししてくれる熱き応援格言は存

先人のありがたき「お言葉」を胸に 飲兵衛はいつもネオン街



酒と女は
2合の酒まで



世の中
酒と女が敵なり
(天田)



くだらない人間とを
言葉で回避するよう

(セネカ)



日陰は酒に始まり
女に終わる
(漱石)

酒は人の
顔を見ない。
(土心ん生)



在している。
「勤労は日々を豊かにし、酒は日曜日を幸福にする」(フランスの詩人・ボードレール)
「酒は人を魅する悪魔である。うまい毒薬である。心地よい罪悪である」(キリスト教の神学者・アウグスティン)



サイコロと
女と酒は
娯楽と
苦痛を
もたせし
(ローガウ)



とき
には
我を忘れる
ほど酔つて
人間の特権だ
(周五郎)



仲の良い
二人の目撃士
(ボードレール)

ヌス)
「人は5つの理由で酒を飲むことができるのである。まずは祝祭日のため。次に、その場の渴きを癒すため。それから、未来を拒むため。その上に美酒をたたえて。最後に、どんな理由からでも」(ドイツの哲学者・

リッケルト)
「ときには我を忘れるほど酔うことも人間の特権だ」(小説家・山本周五郎)
「酒がいちばんいいね。酒というのは人の顔を見ない。貧乏人も金持ちも同じように酔わせてくれるんだ」(落語家・古今亭志ん生)
「あらゆる冒険は酒に始まるんです。そうして女に終わるんです」(小説家・夏目漱石)
「酒を飲め、こう悲しみの多い人生は眠るか酔うかして過ごしたがよろう」(オマル・ハイヤーム)
やはり、こうした先人の言葉を眺めてみると酒飲みが、酒を飲まない人に対して、言い訳というか、自己弁護というか、理論武装というか、そんな感じにも受け取れる気もする。
実際、酒を飲んでる時間はこうしたありがたき言葉を頭に思い浮かべて盃を傾けていることなどそんなにない。むしろ昨夜の深酒を後悔しながら、自分を慰めるようにしてこの言葉を噛み締めるほうがありがたみも増す。
そうして最終的には、「酒のないところに愛はない」(ギリシャの詩人・エウリピデス)という境地にたどり着く。酒飲みはやっぱり、ロマンチストだ。